

王への教訓 一宝の首飾りといわれるもの ナーガールジュナ（龍樹）作

サンスクリット語で、ラージャ・パリカター・ラトナ・マーラー（Rajaparikatha-ratna-mala）
チベット語で、ギャルポ・ラ・タムチャワ・リンポチェー・テンワ
（『王への教訓 一宝の首飾り』）

一切の仏陀と菩薩たちに礼拝いたします

第1章 来世における善き再生と永続する幸せの境地（一時的な幸せと究極の幸せ）

1

すべての過失から解放され、すべての功德に飾られた、一切有情の唯一の友である一切智者に礼拝いたします。

2

王よ、あなたに仏法の教えを成就させるため、ただ善き教えを説こう。なぜならば、[あなたのような] 正法の器となる者に教えが成就するからである。

善き再生と永続する幸せの境地について

3

最初に[来世における天界や人間界への] 善き再生を得て、後に永続する幸せの境地（解脱）を得る。何故ならば、善き再生を得てから、徐々に永続する幸せが訪れるからである。

4

善き再生とは幸せであり、永続する幸せとは解脱である。それによって得られる成就是、要約すれば、信心と智慧である。

5

信心があるので教えに依存し、智慧があるので真実を知る。この二つのうち、根本は智慧であり、その前行は信心である。

6

欲望、怒り、恐怖、迷妄のために教えに背くことがない人は、信心を持つ者と言われ、永続する幸せ（解脱）を求める者たちは、最高の器である。

善と悪

7

身・口・意の行いをすべてよく完全に分析し、自他の利益を知って常に行いをなす人は賢者である。

8

殺生をしない、[人の] ものを盗まない、他人の妻と邪姪を犯さない；嘘、両舌、乱暴な言葉（悪口）、無駄話をすべて慎み、

9

貪欲、害意、邪見をすべて捨てること、これらが十の白い道（十善業）であり、その反対が黒い〔道〕（十不善業）である。

10

飲酒を慎み、〔正しい方法で〕生活の糧を得て、〔他者に〕害を与えず、敬意を持って布施をし、供養に値する人を供養し、慈愛を持つこと、〔実践すべき〕教えとは、要約するとこれらのことである。

正しい道からの逸脱

11

からだを苦しめるだけでは教え〔にかなった行い〕にはならない。それによって他者を害する〔行い〕を捨てることにもならないし、他者を利益することにもならないからである。

12

布施、持戒、忍耐を明らかにする正法という大道に敬意を払わず、からだを苦しめる黒い（悪い）牛のような道を見て〔自らとその弟子たちを欺く〕その道を彷徨う者たちには、

13

限りない有情の樹に囲まれた恐ろしい輪廻の森は耐え難く、からだは煩惱という邪悪な〔蛇〕に抱きつかれ、非常に長い時間を過ごすことになる。

善悪の報い

14

殺生をした果報は短命になり、〔他者に〕暴力を振るうと多くの害を受けることになる。盗みを働くと財産を失い、邪淫を犯すと敵を作る。

15

嘘をつくとき中傷を受け、両舌を使うとき友人を失う。悪口（乱暴な言葉）によって不愉快なことを聞くことになり、綺語（真実に背き巧みに飾り立てた言葉）を使うとき嫌な言葉を聞くことになる。

16

貪欲は心にある願いを破壊し、害意は恐怖を引き起こす。邪見によって誤った考えを持ち、飲酒は心を錯乱させる。

17

施しをしないと貧乏になり、誤った方法で生活の糧を得ていると、人に騙されることになる。傲慢さによって卑しい階級に生まれ、嫉妬によって貧相な姿に生まれる。

18

怒りによって卑しいカーストに生まれ、賢者にもものを尋ねないことから愚鈍が生じる。これらは人間界における果報であるが、このすべてに先行して〔畜生・餓鬼・地獄という〕悪趣〔の果報を〕受けることになる。

19

これらの不善と言われる行為には、〔以上の〕熟した結果が生じるが、すべての善の果報としては、これらの逆が生じる。

20

執着、怒り、無知によって生じる行いは不善であり、執着、怒り、無知が介在しない行いは善である。

21

不善〔行〕からすべての苦しみと悪趣が生じ、善〔行〕からすべての善趣と一切の生における幸せが生じる。

22

身・口・意によるすべての不善〔行〕をやめ、常に善〔行〕を実践すること、この二つが二種の教えであると説かれている。

23

この教え〔の実践〕により、地獄、餓鬼、畜生という〔三悪趣の不幸な生〕から解放され、天人や人間〔という善い世界（善趣）に生まれ変わり、〕 広大な幸せ、栄光、政権を得る。

24

〔四〕 禅、〔四〕 無量、〔四〕 無色〔を修習すること〕により、梵天など諸天の幸せを体験することになる。要約すると、以上が来世における善き再生とその果報である。

鏡による無我の教え

25

一方、永続する幸せについての教えは微細で深遠なものとして現れるため、まだ〔それを〕聞いたことのない凡夫（子供じみた愚か者）たちを恐れさせる、と勝利者（仏陀）は説かれた。

26

「自我は〔現在〕存在しておらず、〔未来に〕存在することもない。私のものは〔現在〕存在しておらず、〔未来に〕存在することもない」と説かれて、凡夫は恐れ、賢者は恐怖を滅する。

27

一切の輪廻の有情は「私は存在する」という我執から生じ、「私のもの」に捉われている有情に対しては、ただ利益のみをなすようにと〔世尊は〕説かれた。

28

「私は存在する。私のものも存在する」と言うことは、勝義（究極の真理）においては誤りである。何故ならば、正しい究極のありようを完全に知るならば、この両者は存在しないからである。

29

〔五〕 蘊は我執から生じたものであり、我執は、究極においては偽りの存在である。もし種子が偽りであるならば、それから生じたものが真実であることなどどうしてあろうか。

30

このように、五蘊は真実の存在ではないと見抜くことにより、我執を滅することになる。我執を捨てたなら、のちに五蘊が生じることはない。

31

鏡に依存して自分の顔の映像が現れるが、勝義においては〔顔の実体は〕微塵も存在していない。

32

これと同様に、五蘊に依存して我執を見ることになる。しかし自らの顔の映像のように、真実においては〔顔の実体は〕どこにも存在していない。

33

このように、鏡に依存しなければ自分の顔の映像は現れないと同様に、五蘊に依存しなければ我執も〔現れることはない。〕

34

聖者アーナンダはこのような意味を聞いたことにより、法眼を得る者となり、比丘たちに繰り返し説いたのである。

輪廻のありよう

35

五蘊に対するとらわれが存在する限り、我執も存在する。我執が存在するならば行為が生じ、行為から誕生が生じる。

36

この〔我執・行為・誕生〕という三つの道には、始め、終わり、中間がなく、輪廻の輪は火の輪のように、交互に因となってこの三つの道を廻っている。

37

〔この輪廻の輪は〕自分からも、他者からも、その両方からも、〔過去・現在・未来という〕三世〔のそれぞれ〕からも得たことはないので、我執は滅して、行為と誕生〔が生じる。〕

38

このような因果による誕生とその消滅を見る人は、真実として世間は存在するとも、存在しないとも考えることはない。

39

すべての苦しみを滅するためにこの教えを聞いても、分析することもなく、恐れる必要のない場所で恐れている者たちは、完全に無知であるため、恐れ慄いている。

善悪を超えた涅槃

40

涅槃にはこれらのすべてが存在しないなら、あなた方（声聞・独覚の修行者たち）は恐れることはない。この世界ではすべてが存在しないと言われているのに、あなたはなぜ恐れるのか。

41

解脱には自我もなく、五蘊もない。もし解脱がそのようなものならば、自我と五蘊が排除されたのだから、あなたはどのようにこれを喜ばないのか。

42

もし涅槃が事物でないならば、それが事物であることなどどうしてありえよう。事物と事物でないものに対するとらわれを滅したのが、涅槃であると言われている。

43

要約すると、虚無論では行為の結果は存在しないと言われているが、不徳〔の行い〕をすれば悪趣に墮ちるのだから、それは邪見であると説かれている。

44

要約すると、实在論では行為の結果が存在すると言われているのだから、福德は善趣の因に等しく、正しい見解（正見）であると説かれている。

45

智慧によって虚無論と实在論を寂滅したため、罪と福德〔の両者〕を超えて、悪趣と善趣から自由になることが解脱である、と聖者たちは説いている。

因果の法と縁起について

46

生起には因があることを見て、虚無論を克服する。消滅もまた因を伴うことを見て、实在論も受け入れない。

47

〔因が結果より〕先に生じることも、〔因と結果が〕同時に生じることも、〔勝義においては〕因ではない。ゆえに、因は存在しない。何故ならば、世間においても、勝義においても、そのような生起はまったく認められていないからである。

48

「これが存在するからそれが生じた」というたとえのように、長いものがあるから短いものがある。「これが生じたからそれが生じた」というたとえのように、灯明が生じたから光が生じる。

49

長いものがあるから短いものがある。〔それらは〕それ自体の本質から〔あるの〕ではない。これと同様に、灯明が生じることはないのだから、光もまた生じない。

50

このように結果は原因から生じることを見る人は、世俗の世界は戯論から生じていることをあるがままに受け入れて、虚無論を受け入れることはない。

51

消滅は戯論から生じたのではない〔と主張して〕正しくあるがままのありようを受け入れる人は、实在論を受け入れることもない。ゆえに、〔虚無論と实在論の〕どちらにも依存しない者は解脱する。

陽炎と水のたとえ

52

遠くから見たものは近くに行くときより明らかに見える。もし、陽炎が水ならば、どうして近づいても〔水が〕見えないのだろうか。

53

遠くにいる人たちにはこの世界は真実に見える。しかし、近くにいる人たちには、無相で〔実体のない〕陽炎のように見える。

54

陽炎は水のように見えるが、水ではなく、真実〔の存在〕ではない。これと同様に、五蘊は自我のように見えるが、それらは自我ではなく、真実〔の存在〕ではない。

55

陽炎を「あれは水である」と考えてそこに行き、「ここに水はない」と言ってその水に固執するのは愚か者である。

56

これと同様に、陽炎の如き世界が存在する、あるいは存在しないと行ってそれに固執する人は無知であり、無知が存在すれば解脱に至ることはない。

57

虚無論者（因果の法を否定する人）は悪趣に赴き、実在論者（因果の法を肯定する人）は善趣に赴く。正しくあるがままの真実を知って、この両者に依存しない人は解脱に至る。

有と無を克服する

58

正しくあるがままの真実を知ることにより、〔賢者は〕実在論も虚無論も主張することはない。ゆえに〔あなたが彼らを〕虚無論者だと考えているのなら、何故〔彼らは〕実在論者にならないのか。

59

もし実在論を否定することで、彼らが虚無論者になるという意味ならば、これと同様に、虚無論を否定することにより、彼らが実在論者になるとどうして言えないであろうか。

60

彼らは勝義においては虚無論者ではなく、虚無論の行いもせず、悟りへの道に依存しているだから〔虚無論の〕考えも持っていない。そのような者たちを、どうして虚無論者だと言うのか。

61

人とは五蘊であると述べる世間の者たちや、〔カピラ仙人を始祖とする〕サーンキヤ学派、カナダ仙人の弟子たち（ヴァイシェシカ学派）、〔マハーヴィーラを始祖とする〕衣を着ない人たち（ニルグラント学派、ジャイナ教）が、実在論と虚無論からの超越を説くかどうかを彼らに尋ねるべきである。〔説いているとは答えないであろう〕

62

ゆえに、甘露のような諸仏の教えは、有と無を超越した深遠なものであると説かれており、法の贈り物と知るべきである。

時間について

63

〔この世界が〕消滅したならば、行くこともなく、来ることもない。一瞬たりともとどまることなく、三世を超えたこの世界が、勝義においてどうして存在できるだろうか。

64

ゆえに〔世間と涅槃の〕どちらにも、真実として、行くこと、来ること、とどまることは存在していない。ゆえに、どんな違いが勝義において存在するというのか。

65

とどまることが存在しないので、生成と消滅は真実として存在していない。生成、持続、消滅は、勝義においていったいどこにあると言うのか。

66

もし、常に変化するならば、事物はどうして刹那滅でないと言えるのか。もし、変化がなければ、勝義において他のものに変異することなどどうしてあろうか。

刹那滅の否定

67

一部分、あるいは全体が消滅するから刹那滅であるというならば、どちらにも違いが見られないため、それらはどちらも道理にかなっていない。

68

刹那滅であるならば、すべては存在しないため、古くなるということがどうしてありえよう。もし、刹那滅でないならば、それは常住であり、古くなるということがどうしてありえよう。

69

刹那に終わりがあるならば、それと同様に、始めと中間がなければならない。刹那にはこのように〔始め、中間、終わりという〕三つの本質があるので、一刹那に持続する世界は存在しない。

70

また、始め、中間、終わりについても刹那と同様に考えるならば、始め、中間、終わりは自分から、あるいは他のものから〔生み出されたの〕ではない。

71

〔いかなる微粒子も〕異なる方角を持つため、ひとつのものではない。部分を持たないものは何ひとつ存在しない。さらに、ひとつのものがなければ多数は存在せず、有がなければ無も存在しない。

72

消滅、あるいは対治（対策）によって存在するものがなくなると言うならば、存在するものがなければ、どうやって消滅や対治があると言うのか。

仏陀の沈黙－一切法は深遠である

73

ゆえに、勝義においては、涅槃によって世間が無に帰することはない。「世界に終わりはあるのか」と問われた時、勝利者（仏陀）は沈黙にとどまられた。

74

ゆえに、一切智者（仏陀）はこのように、深遠なる教えを〔正しい〕器でない有情には説かれなかったため、それを理由として、賢者たちによって一切智者として知られている。

75

このように、永続する幸せの境地（解脱）は深遠であり、理解を超えているため、あらゆるよりどころを離れていると、一切を見抜かれた無上正等覚者（完全なる仏陀）たちは説かれた。

愚かな人々の恐れ

76

〔事物には固有の存在があるという概念の〕よりどころがないことを恐れる愚かな人々は、実際によりどころを喜んで、有と無を超えることなく、賢くない者たちは破滅する。

77

恐れる必要のないよりどころを恐れる人々は破滅し、他の人々をも破滅させる。王よ、あなたはこれらの破滅した人々によって、決して破滅させられないようにすべきである。

78

王よ、あなたが破滅することのないように、〔有と無の〕二つに依存することなく、正しい出世間のありようを經典に従って説いたのである。

79

〔經典から引用された意味を持つ〕この深遠な〔教え〕は、罪と福德の行いを超越したものである。他の非仏教徒たちや我々（下位の仏教哲学学派）でさえ、よりどころのない恐れは体験していない。

人無我を説く

80

人は地でもなく、水でもなく、火でもなく、風でもなく、虚空でもなく、意識でもない。これらのすべてでもないならば、これ以外のどんなものが人だと言うのか。

81

人は〔地・水・火・風・空・識の〕六つの要素（六界）を集めたものなので、実体を持って存在しているのではない。それと同様に、それぞれの要素もまた、〔六つの要素を〕集めたものなので、実体を持って存在しているのではない。

82

五蘊は自我ではなく、それ（自我）の中にそれ（五蘊）があるのでもない。それ（五蘊）の中にそれ（自我）があるのでもない。五蘊と自我は、火と薪のように混ざり合っているのでもない。では、自我はどのように存在しているのか。

法無我を説く

83

〔水、火、風の〕三要素は地の要素ではない。この〔地の要素の〕中に〔三要素が〕あるのでもなく、それ（三要素）にこれ（地の要素）があるのでもなく、それ（三要素）がなければ〔地の要素も〕ない。また、それぞれの〔水、火、風の〕要素も同様である。ゆえに、それぞれの要素もまた、自我と同様に偽り〔の存在〕である。

84

地・水・火・風のそれぞれは、その自性によって〔成立している〕のではない。〔これらのうちのどれか〕三つ〔の要素〕が存在しなければ、残りのひとつも存在しない。どれかひとつが存在しなければ、他の三つ〔の要素〕も存在しない。

85

もし三つ〔の要素〕が存在しなければ、〔四大要素の残りの〕ひとつも存在しない。もし、〔この中の〕ひとつが存在しない時、〔残りの〕三つ〔の要素〕も存在しないなら、そのそれぞれも存在することはなく、どうやって集合体が生じると言うのか。

86

そうでなく、それぞれが個別に独立して存在するならば、薪がない時、どうして火は存在しないのか。同様に、どうして、湿潤、障害、結束が存在しなければ、水、風、地は存在しないのか。

87

しかし、火は〔薪がなければ存在しないが、他の三つの要素はそれ自体の固有の実体によって存在していることが〕知られている、〔とあなたが言うならば、〕これらの三つ〔の要素〕は他のものに依存して生じたものなので、縁起の見解にかなっていない。

88

個別にそれ自体で存在するものが、どうやって互いに〔依存して〕存在するだろうか。個別にそれ自体で存在しないものが、どうやって互いに〔依存して〕存在するだろうか。

89

〔これらの要素が〕個別にそれ自体で存在しないと言うならば、ひとつが存在するところには残りの三つも〔存在する。〕もし〔それらが〕混ざっていないなら、それらはひとつのところにあってのではない。もし混ざっているならば、それらは個別にそれ自体で存在しているのではない。

90

〔これらの要素が〕個別にそれ自体で存在していないなら、個別の特徴（自相）などどうやって存在するというのか。個別にそれ自体で存在していないものをいくら集めても、〔個別の特徴は〕存在しない。個別の特徴は、世俗のものだと言われている。

存在・名称・意識についての法無我を説く

91

色・（声）・香・味・触覚などについても〔その否定方法は〕同様であり、眼・意識・物質的存在などや、無明・行為・誕生、

92

行為者・行為・対象物、数、所有物、因果、時、長短などの認識対象、名前と名前を持つ者なども同様である。

93

地・水・火・風、長短、微細なものと粗いもの、善などは意識の中に滅していくと牟尼は説かれた。

94

意識は形に現れず、〔その対象は〕無辺であり、すべてを統括する主であるが、この意識の中に、地・水・火・風のすべては滅していく。

95

ここで、〔禅定にとどまって空を直観で見抜く時〕、長・短、微細なものと粗いもの、善と不善、名前、物質的な存在（色）などのすべてが滅していく。

96

無知であったため、以前意識に現れたすべてのものは、〔究極のありようを〕知ったことにより、のちに〔聖者の等引（禅定）の意識の中に〕このように滅していく。

97

意識という火の薪は、この世のすべての現象であると言われている。これらがあるがままによく分析する光によって燃やすと、寂滅に至る。

98

以前無知によって妄想していても、のちに真如を確信すると、事物〔の実体〕を見ることはない。その時、無自性であるものが、いったいどこにあるというのか。

99

色（物質的存在）という事物は単なる名前でしかなく、虚空もまた単なる名前に過ぎない。

〔地・水・火・風・の四大〕要素が〔実体として〕存在していないのに、色（物質的存在）がどうして〔実体として〕存在するというのか。ゆえに、単なる名前さえ存在していない。

100

感受作用・識別作用・形成力・認識作用（意識そのもの）もまた、〔地・水・火・風の四大〕要素や自我と同様に考えるべきである。ゆえに、〔地・水・火・風・空・識の〕六界は無我である。

以上が『宝行王正論』より、「来世における善き再生と永続する幸せの境地」（一時的な幸せと究極の幸せ）について説かれた第1章である。

第2章 一時的な目的と究極の目的を交互に説く

すべての事物は実在するのでもなく、実在しないのでもない

1

芭蕉樹のすべての部分が消滅したならば、何も残らないのと同様に、人もまた、〔地・水・火・風・空・識という六〕界のすべてが消滅したならば、〔何も残らないのと〕同様である。

2

ゆえに、すべての勝利者たちは「一切法はすべて無我である」と説かれた。六界のすべては無我であると、あなたのために示したのである。

3

このように、自我〔がある〕、自我はない、〔と考えて〕正しくあるがままに見ることがないため、偉大な牟尼（仏陀）は「自我はある」「自我はない」という〔二つの見解をどちらも〕否定されたのである。

4

牟尼は見たり聞いたりすることを、真実でもなく、偽りでもないと説かれた。一方〔の立場〕とは反対〔の意見〕が出たならば、それは勝義において、どちらも〔真実では〕ない。

5

このように究極的には、この世界は真実と偽りを超えている。それゆえ、真実においては、〔この世界は〕あるということも、ないということも説かれていない。

6

このように、いついかなる時も、「有限である、無限である、その両方である、どちらでもない」などと一切智者がどうして説くことなどできようか。

十四無記（非仏教徒の質問に対して釈尊が答えることを避けられた十四の質問）

7

無数の仏陀たちが過去に現れたそのように、未来にも現れ、現在もここにおられる。限りない数の有情たちが〔過去・現在・未来〕の三世に生まれ、仏陀たちは三世にとどまることを望まれる。

8

この世界が増大する原因はなく、滅尽は三世にわたって存在するのなら、何故一切智者は「この世界に始めはあるのか、終わりはあるのか」という問いに答えることをされなかったのか。

幻の象のたとえ

9

凡夫に対する秘密は何かと言え、深遠なる仏法である。この世は幻のようなものであるという仏陀の教えは、甘露〔のようなもの〕である。

10

たとえば幻の象に生起と消滅が見られても、勝義においては生起と消滅は存在しないのと同様に、

11

幻のような世界に対して生起と消滅が見られても、勝義においては生起と消滅は存在していない。

12

それと同様に、幻の象はどこから来たのでもなく、どこに去るのでもない。ただ心の迷妄によって〔存在しているだけであり、〕真実として存在しているのではない。

13

それと同様に、幻のようなこの世界はどこから来たのでもなく、どこに去るのでもない。ただ心の迷妄によって〔存在しているだけであり、〕真実として存在しているのではない。

深遠なる仏法は理解を超えている

14

このように、三世を超えた本質は世俗の言説によって仮設されただけのものなので、ある、ない、と〔論議されている〕この世界は勝義においてどのように存在するというのか。

15

仏陀はこの理由により、「〔この世界に〕終わりはあるのか、ないのか。あつてかつ、ないのか、あるのでもなく、ないのでもないのか」という四種〔の問い〕に対して答えを述べることを控えられたのである。

16

このからだは一時的に不浄で粗い〔レベルの〕ものであり、目に見える認識対象ではあるが、常に見えているその時も、〔不浄で苦しみの本質を持つものとして〕心にとどまることはない。

17

その時、抛り処がなく、きわめて微細で、直接知覚できない深遠なる正法が、容易に心に現れることなどどうしてあろうか。

18

そこで〔悟りを開かれた〕仏陀釈迦牟尼は、この法は深遠であるがゆえに、人々が理解することは難しいだろうと思われて、〔始めは〕法を説くことをやめられた。

理解を誤ると破滅する

19

この法は誤って理解すると賢くない人たちを破滅させる。何故なら、彼らは虚無論という不浄の中に沈んでしまうからである。

20

さらに、自分は賢いと奢る愚か者も、この法を正しく理解しない。ゆえに、この法を誹謗して自らを破滅させ、無間地獄に真逆さまに墮ちることになる。

21

悪い食べ物を食べれば破滅し、良い食べ物〔を食べれば〕長寿、無病、力を得て健全になるのと同様に、

22

法を正しく理解しなければ、破滅に至り、法を正しく理解することにより、幸せと無上の悟りに至る。

23

ゆえに、この法を〔誹謗することを〕やめ、虚無論を捨てることにより、あらゆる目的を達成するために、最勝なる正しい理解〔を得るよう〕努力するべきである。

24

この法を正しく理解しなければ、我執が生じ、それから善と不善の行いが〔生じる。〕それから〔輪廻における〕良き生と悪い〔生が生じる。〕

25

ゆえに、我執を断滅するこの法を理解するまでは、布施、持戒、忍耐について説く法を敬い〔実践〕するべきである。

正しい政道と正しくない政道

26

〔王よ、〕すべての行ないにまず法を先行させ、中間にも法を携え、最後にも法を維持して〔その行いを〕全うするならば、今世においても、来世においても害を得ることはない。

27

法によって名声と幸せが生じる。今世においても、死に直面した時も恐れはない。来世においても幸せが増大し、それゆえ常に法に依存するべきである。

28

法こそ最高の政策である。法によって世間の人々は喜び、人々が喜ぶことにより、〔王は〕今世においても、来世においても欺かれることはない。

29

しかし、政治が法に背くなら、世間の人々が〔その政治を〕喜ぶことはない。世間の人々が〔その政治を〕喜ばなければ、〔王は、〕今世においても、来世においても幸せになることはない。

30

悪趣に至る道にいて、他者を欺く知性に欠けた悪い心を持つ人々が、何が意義あることかを理解することなどできようか。

31

他者を欺くことに専念する人は、何千もの生において欺かれることになるだろう。そのような人がどうして〔良い〕政策を持つ人になどなりえよう。

32

敵をやっつけたいと望むなら、〔自分の〕過失を取り除き、良い資質に依存するべきである。それによって自分を利益し、敵もまた落胆するだろう。

四摂事（弟子を集める四つの徳ある行い）

33

施し（布施）、慈愛の言葉（愛語）、他者を利益する行為（利行）、言葉と実践が一致していること（同事）〔という四摂事〕によって世間の人々と法を集め、それを護るべきである。

不妄語（嘘をつかない）

34

ひとつの真実〔の言葉〕（不妄語）だけが、王に対する堅固な信頼を生じる。その反対に、嘘は王に対する不信を抱かせる最悪のものである。

35

偽りがないことが真実なのではなく、心を翻さないことでもない。他者に対して一心に利益をなすことが真実であり、〔他者に〕利益をなさなければ、それは虚言である。

36

ただひとつの施しが、王の過失をみな覆い隠すように、強欲は王の功德という財物をすべて破壊する。

己に打ち勝つこと

37

寂静を達成した人には深遠なる〔人徳が〕あるため、最勝なる尊敬を得る。〔最勝なる〕尊敬から、輝きと困難に負けない努力が生じる。ゆえに寂静を達成するべきである。

智慧

38

智慧がある人には心の散漫がなく、他者に頼らず堅固である。従って、欺かれることのない王は、智慧を高めることに専念するべきである。

39

真実、布施、寂静、智慧という四種の〔善き〕資質を具えた人の王者は、四種の資質からなる法のように、天人と人間たちの賛嘆〔の対象〕となる。

真実の友人

40

清らかで、汚れなき智慧と慈悲を持つ人々と共にいる〔王には、〕常に智慧と法が増大する。

41

有益な言葉を語る人は稀であり、それに耳を傾ける人はきわめて稀である。それらの人々よりさらに稀なのは、たとえ不愉快な言葉であっても有益な言葉なら、すぐに実行する人である。

42

ゆえに、たとえ不愉快な言葉でも、有益であると知ったならすぐに実行するべきである。病気を治癒するには自分を大切にし、耐えられない〔ほど苦い〕薬でも飲む〔のと同様である。〕

無常について知る

43

命、無病、王権は無常であることを常に考えて、正しく精進し、法に対してただ一点に〔集中して〕努力するべきである。

44

疑いなく死は訪れるものであり、死ねば〔以前になした〕不徳の行いによって苦しみを得ることを見て、〔悪い行いをなすべきではなく〕、一時的に幸せであっても、不徳をなすことは正しくない。

45

ある時は恐れがないことを見て、別の時は恐れを見る。もし、ある時に平穩があるならば、別の時はなぜあなた（王）に平穩がないのか。

飲酒の禁止

46

飲酒によって世間から軽蔑され、務めをおろそかにし、財産も尽き果てる。迷妄によってなしてはならないことをしてしまう。ゆえに、飲酒は常に捨てるべきである。

賭け事の禁止

47

賭け事は、食欲、不快、怒り、不正、呵責の元であり、嘘、中傷、悪口（^{あつこう}激しい言葉）の因となる。ゆえに、常に〔賭け事を〕避けるべきである。

女性のからだの不浄さとそれに対する執着

48

女性に対する執着はほとんどの場合、女性の体を美しいと思うことから生じる。しかし、女性のからだには、清浄さは少しも存在していない。

49

〔女性の〕口は、唾液、歯間の歯垢など不浄物の詰まった器であり、鼻は、膿汁、粘液、鼻水の入った器であり、眼は、目やに、涙の器である。

50

腹部は糞や尿、肺や肝臓などの器であり、愚か者は女性をこのように見ず、女性のからだに愛着を持っている。

51

たとえば、無知な人が不浄物を満たした水瓶の飾りに執着するように、この世のことを知らない無知な人は、〔迷妄により〕このように〔女性に愛着を〕持っている。

52

からだという対象物は強い悪臭に満ちており、それは愛着を離れる因となる。しかし、世間の人々は、その〔悪臭にさえ〕強い愛着を持っているのだから、いったいいかなるものに対して愛着を離れることがあるだろうか。

53

たとえば、豚は糞や尿に満ちた場所や、吐瀉物に執着しているが、それと同様に、人も糞や尿にまみれたところに欲望を起し、豚が吐瀉物などに執着しているように、それに対して愛着を持っている。

54

からだは不浄な〔蛆虫の〕都であり、不浄物が生じる穴のようなものである。それを愚か者は快樂の対象と呼んでいる。

55

あなたは自分の糞や尿などのそれぞれを不浄物と見ているが、それが集まったからだがどうして魅力的なものに見えるのか。

56

血液と精子が混ざったことにより、不浄な種子の心髄が生じる。不浄物の本質だと知りながら、それに対していったい誰が欲望を持ち、執着するだろうか。

57

この不浄物の集まりが湿気に濡れ、それが濡れた皮に包まれて、女性の下腹部の中でそれらの液体とともにただ横たわっている。

58

容姿のよい者も容姿の醜い者も、年老いた者も年若い者も、いずれの者であっても、すべての女性のからだは不浄なものなのに、あなたは何に対してそれほど執着を起こすのか。

女性のからだに執着をもってはならない

59

もし、不浄物の色がよく、きわめて新鮮で姿がよくても、それに執着する価値はないと思うのと同様に、女性のからだもまたそのようである。

60

骨の外側は皮膚で覆われており、内側は悪臭を放つこの死体の本質は、きわめて耐え難く現れているように、それをなぜそのように見ないのか。

61

この皮膚もまた不浄なものではなく、飾りのようなものである、と言ったところで、不浄物の集まりを包む覆いのように、どうして清浄なものになると言えるのか。

62

不浄物が満ちた水瓶は、たとえ外見は美しくても〔人は〕それを嫌う。不浄物の本質であるからだは不浄物で満ちているのに、どうしてそれを嫌がらないのか。

63

もしあなたが不浄物を嫌うなら、香水、花輪、飲食物などの清らかなものさえ不浄物にしてしまうこのからだを、なぜ厭わないのか。

自分のからだも不浄である

64

自分や他者の不浄物が嫌われるように、自分や他者の不浄なからは、なぜ嫌われないのか。

65

女性のからだの不浄なものであるように、あなた自身のからだも同様〔に不浄〕である。ゆえに、内と外のものに対する食欲を離れることが、どうして正しくないと言えるのか。

66

九つの門から、自分は不浄物を流し出している。自分でいくら洗い清めても、からだの不浄なものであることを理解しなければ、あなたに説明しても何の利益になるというのか。

(九門：両目、両耳、両鼻孔、口、大小の排泄器官のこと)

女性のからだを称える愚かさについて

67

この不浄なからだに美しい詩を作るとは、ああ、何と慎しみのないことか。ああ、何と愚かなことか。ああ、人としてどれほど恥ずかしいことか。

68

無知の暗闇に覆われている人々は、この世においてほとんどが〔女性のからだを貪る〕欲望のために諍いを起こし、不浄物のために犬のように争っている。

発疹のたとえ

69

たとえば、発疹を搔くと楽（幸せ）になるけれど、それよりも発疹がなければもっと楽である。それと同様に、世間の人々は欲望が満たされると楽（幸せ）になるけれど、欲望がなければそれよりも楽である。

70

もし、あなたがこのように考察するならば、食欲を離れることを達成していなくても、食欲は抑制され、それによって女性への愛着はなくなる。

殺生の禁止

71

短命、恐れ、苦しみ、地獄の因は尽きることがなく、その因は狩猟〔などの殺生〕である。ゆえに、常に殺生をしないよう堅固にこれを守るべきである。

悪を捨てて善を守る

72

すべての部分が不浄まみれの毒蛇が、毒を吐いて〔人を〕恐れさせるように、それに頼るとからだを持つものたちが恐怖を抱くもの、それが悪である。

73

大きな雨雲が生じると、農夫たちがそれを見〔て喜ぶ〕るように、人がそれに頼ると喜びを感じるもの、それが善である。

74

ゆえに、自分と世間の人々が無常の悟りを得ることを願うなら、非法（仏法に反すること）〔の行い〕を捨てて、怠ることなく、法に依存するべきである。

悟りの三つの因

75

〔悟りの〕源は、山の王のように堅固な菩提心と、十方位に遍く行きわたる慈悲心と、不二を抛り処とする〔平等なる〕智慧である。

偉人の^{しるし}相好である三十二種のすぐれたからだの特徴

76

偉大なる王よ、偉人のしるしである三十二の相によってあなたのからだがどのように飾られるか、それをお聞きください。

77

仏塔に供養し、聖者や導師、長老たちによく奉仕するならば、栄えある王よ、あなたは、①手と足に法輪が記された転法輪王になるだろう。

78

王よ、〔完全な戒律受けた〕法を常に堅固に維持するべきである。それにより、②御足が大地に安住する菩薩となるだろう。

79

布施、慈愛のこもった快い言葉、利益の行い、言葉と実践が一致する行いにより、王よ、③光の網によって結ばれた栄えある手指を持つ者となるだろう。

80

最勝なる食べ物と飲み物をたくさん施したことにより、栄えある王よ、④手足が柔軟になり、あなたの手、足、肩甲骨、^{うなじ}頸が広くなり、あなたのからだは大きくなって、⑤からだに七つの隆起がある者となるだろう。

81

暴力をふるわず、死刑囚を釈放するならば、王よ、あなたの⑥からだは美しく直立して大きく、⑦長寿で、指が長く、⑧^{かかと}踵が広い者になるだろう。

82

正しく授かったすべての法を増大させるなら、王よ、あなたの⑨体色は美しく、足の^{きよこつ}距骨は露出せず、⑩体毛が上向きに生える相を持つ者となるだろう。 (^{きよこつ}距骨とは、^{かかと}踵付近にある7つの足根骨のひとつ)

83

学問や工芸などの諸部門を尊重し、保護や施しをするならば、あなたは⑪アーイーネーヤ（鹿王）のような脚を持ち、聡明で智慧のすぐれた者となるだろう。

（アーイーネーヤとは黒いカモシカのこと鹿の王とみなされている）

84

自分の財宝を持つようになったなら速やかに施しをしよう、と誓う禁戒により、⑫広く心地よい手を^て得て、世間の人々を導く者になるだろう。

85

互いに離反している親族や友人を正しく結束させるなら、王よ、栄えある教えの秘密は、⑬生殖器官が内に隠されたすぐれた聖者になるだろう。

86

立派な家や敷物、装飾品など、快く良いものを正しく施すことにより、⑭皮膚は純粹無垢で非常に柔らかく、⑮磨かれた汚れのない金のようになるだろう。

87

無上なる力を与え、道理に沿ってラマに従うならば、栄えある王よ、⑯一本ずつ右旋しているからだの毛に飾られ（身毛右旋相）、⑰眉間に右旋する^{びやくごう}白毫を持つ者となるだろう。

（白毫：仏陀の眉間にあり、光を放つと言われる白い毛のこと）

88

快く喜びを与える言葉を話し、善説に見合ったことをなすことにより、〔王よ、〕あなたは⑱肩先が丸く、⑲獅子のような上半身を持つお姿になるだろう。

89

病人を介護し、治癒するならば、⑳両肩はまるやかで広く、自分も心安らかになり、㉑すべての味覚が最高のものとなるだろう。

90

法にかなった行為を先にすることで、㉒あなたの頭頂に肉髻がよく立ち上がり、㉓〔あなたのからだは〕ニグローダ樹のように対称的になるだろう。

（ニャグローダ樹とも言う。サンスクリット語でバンヤン樹のこと）

91

真実の柔らかい言葉を長期にわたって話していると、王よ、②4 舌は広大になり、②5 梵天の声を持つ者となるだろう。

92

常に絶え間なく真実の言葉を語ることにより、栄えある王よ、②6 獅子のような頬を持ち、克服し難い者となるだろう。

93

特に〔他者への〕尊敬と奉仕をし、道理に従っていくなれば、②7 歯が大変白く、白金に等しい歯を持つ者になるだろう。

94

仲たがいさせたり、両舌のない言葉に長く馴染むことにより、栄えある方よ、②8 40本のすばらしい歯を持ち、②9 歯は均等にそろって、③0 すばらしい歯を持つ者になるだろう。

95

執着、怒り、無知がなく、愛情を持って有情を見ることにより、③1 眼は清らかで、〔サファイヤのような〕群青色になり、③2 雄牛のような睫毛を持つ者になるだろう。

96

このように要約して示された三十二相が、獅子のような偉大な方の特徴（相）であるとよく知るべきである。

97

八十種好（副次的な特徴）は、慈しみ（愛）という共通の因から生じるが、このテキストが長くなるのを恐れて、王よ、あなたに説明することを控えた。

諸仏の相好との比較

98

すべての転法輪王にはこれらの〔相好〕が具わっていると言われるが、清らかで、美しく、光り輝いている点で、諸仏に匹敵するものではない。

99

転法輪王の〔三十二〕相と〔八十〕種好と言われるものは、牟尼である自在者（仏陀）に具わっている清らかなお心の一部から生じると言われている。

100

百千万億劫にわたり、一点集中して積んだ善をもってしても、仏陀のおからだの一本の毛さえ生み出す力はない。

101

太陽の光は蛍の光にわずかに似ているのと同様に、諸仏の相も、転法輪王の〔相〕とわずかに似ている。

以上が『宝行王正論』より、「一時的な目的と究極の目的を交互に説く」ことについての第2章である。

第3章 悟りに至るために必要な資糧を積む

量り知れない福德

1

量り知れない福德から、どうやって仏陀の相好が生じたのかを、偉大な王よ、大乘の偉大な典籍からこのように聞きなさい。

(相好：仏の体に具わるすぐれた特徴・よき姿。三十二相とさらに細かい美点である八十種好のこと。八十種好は仏陀の体に具わる八十の副次的特徴)

2

〔福德は〕すべての独覚から生じ、無学と有学の者たちから生じた。この世のすべての福德は、この世と同様に量り知ることにはできない。

3

〔その無限の福德を〕十倍したものにより、仏陀の体毛の毛穴がひとつ生じる。仏陀の体毛の毛穴は、すべてそのようにして生じた。

4

すべての体毛の毛穴を生み出す福德を百倍したものから、〔八十〕種好^{はちじっしゅごう}のひとつの相好が生じる。

5

王よ、非常に多くの福德によって、〔八十〕種好のひとつが完成し、このように八十に至るまでのひとつひとつ〔の相好〕が生じる。

6

八十種好のすべてを完成した福德の集まりを百倍にしたものにより、偉大な方（仏陀）のひとつの相好が生じる。

7

三十の相を完成するための因は広大な福德であるが、それをさらに千倍にしたものにより、満月に似た眉間の白豪^{びやくごう}（白い旋毛）が生じる。

8

〔眉間の〕白豪が生じる福德を百千倍にしたものにより、頭頂に、見ることのできない守護者（仏陀）の頂髻^{ちようけい}が生じる。

9

頂髻の福德を、百・百千・千万億倍したものから、十力を具えた持つ法螺貝がひとつ得られると知るべきである。

(十力：寿命、禪定、資源、行為、再生、祈願、信解、神通力、智慧、法)

10

このように、福德〔の量〕には限りがないが、世界のすべてを十〔方位〕と数えて世界を余すところなく示しているように、量があるということを少しだけ述べた。

量り知れない智慧

11

仏陀の色身（形あるおからだ）の因も、この世界と同様に量り知ることはできないのだから、それなら法身（真理のおからだ）の因など、どうして量り知れようか。

12

すべての因は小さくても、大きな結果が生じるのなら、仏陀の因は量り知れないので、その結果に限りがあるという考えは捨てるべきである。

色身と法身

13

仏陀の色身は福德の集まりから生じた。王よ、法身は要約すると、智慧の集まりから生じた。

14

そうであるならば、この二つの資糧は、仏陀〔の境地〕を得る因である。このように、要約すると、福德と智慧に常に依存するべきである。

菩薩の努力

15

論理と経典の教えという安息を与えるこの因によって、悟りに至る福德〔が生じる。〕これに対して怠慢になってはならない。

16

すべての方位には、虚空・地・水・火・風が限りなく行きわたっているように、苦しむ有情も無数であると言われている。

17

菩薩は慈悲の心により、限りない数の有情たちを苦しみから救済し、確実に仏陀の境地に導いていく。

18

このように堅固にとどまる菩薩は、覚醒している時も眠っている時も、放逸（不注意）を貪っている時でさえ〔慈悲の心を〕完全に維持している。

19

〔有情の数には〕限りがないため、一切有情と同様に、無数の福德を常に集めるべきである。このように福德〔の因〕には限界がないので、限界のない仏陀の境地に達することは難しくないと言われている。

20

誰であっても無量の時にとどまり、無量の有情たちを〔救済する〕ために、無量の悟りを〔得ることを〕願い、無量の善（福德）を願うならば、

21

その人はたとえ悟りが無量であっても、四無量心からなる〔福德と智慧の〕二資糧により、〔無量の悟りを〕速やかに得られないことなどどうしてあろうか。

22

〔菩薩たちの〕福德には限りがないと言われ、智慧にも限りがないと言われる。それによって、〔有情たちの〕からだと心の苦しみを速やかに断滅する。

23

不徳の行いにより、悪趣に〔堕ちて〕飢えや渇きなどのからだの苦しみを得る。しかし、罪をなさず、福德によって来世に生まれ変わるなら、その〔苦しみは〕ない。

24

無知による心の苦しみには、執着、怒り、恐怖、欲望などがあるが、〔菩薩は〕それら〔の煩悩に正しい〕 抛り処がないことを知って、それらを速やかに捨て去る。

25

からだと心の苦しみにより、〔菩薩は〕このように〔ひどくは〕害されていないので、もし世界の果てに至るまで世界の人々を導いたとしても、どうして落胆したりするだろうか。

26

苦しみは、たとえわずかな時間でも耐え難いのため、もし長く続いたなら〔耐え難いのは〕言うまでもない。苦しみがなく、幸せな時は、たとえ〔それが〕長く続いても、どうして苦しみなどあるだろうか。

27

〔菩薩には〕からだの苦しみはない。まして心の苦しみにどうしてあろうか。菩薩は慈悲の心により、世界の苦しみの中に〔自ら望んで〕長くとどまる。

28

ゆえに、仏陀となるには長い時間がかかるからと言って、知性ある者なら怠慢な心を起こすべきではない。〔ゆえに、〕過失を滅し、功德を積むために今世において常に努力すべきである。

一時的な幸せと究極の幸せ（福德と智慧）

29

執着、怒り、無明は過失であると知り、完全に捨てるべきである。執着、怒り、無明を離れることが功德であると知り、敬意を持って依存するべきである。

30

執着により餓鬼界に生まれ、怒りによって地獄界に堕ち、無知によってほとんどが畜生界に行く。その逆により、天界や人間界に〔生まれる。〕

31

過失を滅し、功德を維持することが来世における善き生（一時的な幸せ）を得る法である。智慧によって捉われをことごとく断滅することが、究極の幸せを得る法である。

32

仏像、仏舎利塔、寺院などを敬意をもって建立し、豊かな富をもつ〔王よ、〕非常に広大な住居や寝室なども、建立するべきである。

33

あらゆる宝石で作られた仏像は、容姿端麗にして、善く描かれた〔仏像〕は蓮華座の上に座られるようにしてください。

34

正法と比丘や僧伽（出家者の集団）をあらゆる努力を尽くして庇護するべきであり、金や宝石の網などで仏舎利塔を供養してください。

35

金や銀の華、金剛石、珊瑚や真珠、青玉（サファイヤ）、瑠璃（ラピスラズリー）などで仏舎利塔を供養してください。

36

正法を説く者に対する供養は、物や尊敬とともに喜ばれるものをすべて供養し、六法を尊敬とともに捧げてください。

37

ラマに帰依して奉仕し、敬意をもって教えを聞き、尊像に祈りを捧げ、菩薩を常に敬って供養するべきである。

38

非仏教徒たちには恭敬の念をもち、しかし供養と五体投地はせず、仕えてはならない。無知な人々はそれによって過失を犯し、執着することになるだろうから。

正しい法の護持

39

仏陀のお言葉とそれから作られた経典を書写し、墨、筆をはじめとする施しをまず先行させて行うべきである。

40

故郷に学堂を起し、師の生計を支えて土地の支給も確実にし、智慧を高めることを行なうべきである。

社会福祉

41

高齢者、子供、病人など有情の苦しみをなくすために、その地域に医者、理髪師などを置き、〔あなたが支配する〕田畑の報酬を定めるべきである。

42

宿舎、公園、池、休憩所などを作り、智慧ある王よ、水瓶、寝具、食べ物、干し草、薪などを供給してください。

43

すべての町に家屋、僧院、宿舎〔を作り、〕水の乏しいすべての道に〔水を供給する〕水小屋を作るべきである。

44

病人、守護のない者、苦しみに喘ぐ貧しい者たちを常に慈悲の心でよく守り、彼らの面倒を見て、擁護するべきである。

45

時期に適った飲食物、穀物、果実などこれらのものを乞う人に、施しをしないことがあってはならない。

46

水瓶のあるところには、靴、傘、濾過器、棘抜き、針、糸、^{うちわ}扇などを置いてください。

47

〔薬となる〕三種の果実、三種の解熱剤、バター、ハニー、目薬、除毒剤を水小屋に置き、処方の薬や呪文も書いて置いてください。

48

からだ、足、首につける塗油、毛氈（敷物）、椅子、粥、銅瓶（水瓶）、斧などを水小屋に用意してください。

49

胡麻、米、穀物、食物、薬、油などの備えがある小屋を、涼しい木陰に〔作って〕清らかな水で〔器を〕満たすようにしてください。

50

蟻の穴の入り口などに、食物、水、粗糖、穀類の集積を、堅固な心を持つ人々に常に置くようにさせなさい。

51

食事の前後に、餓鬼、犬、蟻、鳥などに、常に好きなだけ食物を施してください。

52

災厄、凶作、流行病などで荒廃した地域では、世間の人々を幅広く救済してください。

租税の減免

53

貧しい農夫たちに対しては、種や食物〔を供給して〕守り、努めて租税を免じるか、租税を減らしてください。

54

〔困窮する人々を〕執着の苦しみからよく守り、税を免じ、あるいは税を減らし、そのようにとどまることにより、煩惱からも離れるようにしてください。

資産の平等と利他

55

自国や他国の盗賊たちを鎮圧するべきである。そして資産を平等に、価格を適正にするようにしてください。

56

大臣が忠告することは何であれ、〔王〕自身がそれをよく知って、世間の人に役立つことは何であれ、すべてを常に行うべきである。

57

自らの利益は何であれ、何ができるだろうかと考えて、あなたは自分を大切にす。〔それと〕同様に、他者の利益は何であれ、何ができるだろうかと考えて、〔他者を〕大切にすべきである。

生まれながらに持っている権利や能力など（形のないもの）を施す

58

地、水、火、風、薬草、森の樹木のように、私をほんの一瞬でも〔他者が〕望むように使ってください。

59

七歩歩いた間にも、すべての富や財産を捨てる心を持った諸菩薩には、虚空のように量り知れない福德が生じる。

60

姿のよい美しい女性を、それを求める人々に与えるならば、それにより、正法を受持するすぐれた記憶力を獲得するだろう。

61

あらゆる装飾をつけた八万の女性を、すべての必要な物とともに牟尼はかつて施された。

62

色とりどりの光り輝く衣服、飾り、香、花輪などのすべての持ち物を、慈愛をもって求める人々に与えるべきである。

法施

63

法を聞く縁に恵まれず、苦しんでいる人々に、すぐに〔法を聞く〕楽しみを与えるべきである。それよりすぐれた施しはないのだから。

64

もし、ある人に毒が役立つならば、たとえ毒であってもそれを施すべきである。たとえ最高の食物であっても、その人にとって役に立たないならば、その食物を施してはならない。

65

毒蛇に噛まれた時は、〔その人の〕指を切断して助けるべきだと言われているように、牟尼は、利他を成すためには、たとえ不善の行いであっても行うべきであると説かれた。

法を聴聞する

66

正法とその法を説く者に、自ら最高の尊敬と供養をなし、法を聞いて、法の布施をするべきである。

67

世間〔の無駄〕話を楽しむことなく、出世間の〔法〕を喜びとして、自分に対してと同様に、他者にも同じ功德が生まれるようにするべきである。

68

聴聞した法に満足せず、意味を把握し、よく分析して、ラマに対して謝礼を捧げ、常に尊敬するようにしてください。

徳を称え、悪を慎む

69

ローカーヤタ学派などの〔虚無論を説く〕聖典を唱えず、問答によって〔生じる〕慢心を捨てるべきである。自らの功德を称えることなく、たとえ敵でもその功德を称えるべきである。

（ローカーヤタ学派：順世派。この世には物質のみが存在するという唯物論を主張し、始祖はりシ（聖賢）と呼ばれる）

70

〔他者の〕秘密を暴くことなく、悪意を持って〔他者の悪事を〕言いふらさないようにして、他者と自分の過失をよく考えるべきである。

71

過失があれば、賢者は他者に常に告白しなければならないが、その過失を自ら断滅し、できれば他者の〔過失〕もなくすようにするべきである。

72

他者が害を与えても、以前になした〔自分の悪い〕行いを考えて怒ってはならない。苦しみが再び生じることがないように、自分の過失をなくすようにするべきである。

無我について

73

〔布施に対する〕見返りを望まず、他者を利益するべきである。苦しみは自分ひとりで受け入れて、幸せは他者とともに享受するべきである。

74

天人の卓越した〔幸せを〕得たとしても、決して慢心してはならない。餓鬼のように困窮する不幸に出会っても、落胆してはならない。

75

真実〔の言葉〕によって、自らの目的のために王国が衰退したとしても、常に〔真実を〕述べ、それ以外のことを語ってはならない。

76

このように述べたことをそのように行い、常に禁戒に依存すべきである。それにより、栄えある王よ、地上における正しい抛り処として、聖なる者となるだろう。

77

あなたは常に、すべてをよく考察して行いをなし、正しくあるがままの姿を見て、他者に惑わされないようにするべきである。

法の功德-概論

78

法によって王国は幸せになり、すべての方位に知れわたる大天蓋が生じ、諸大臣もみな熱望を持つだろう。

79

死をもたらす縁（条件）は多く、生きるための縁は少ない。それら（生きるための縁）自体が死の縁となる。ゆえに、常に法の実践をするべきである。

80

このように、常に法を実践するならば、すべての世界の人々も自らも幸せになり、それがまた、まず満たされる。

81

法に〔依拠する人〕は、眠っている時も醒めている時も、常に安らかである。心の中に過失がないので、夢の中でさえ幸せを見るだろう。

法の功德-詳しい解説

82

両親に懸命に孝行し、一族の家長に仕え、所有物を正しく使い、忍耐と布施とやさしい言葉〔を話し、〕二枚舌を使わず、

83

禁戒を一点集中して行じ、それによって神々の知覚能力（天自在）を得て、さらにまた、天自在〔の行いをなすだろう。〕ゆえに、そのような法に依存すべきである。

84

ヴァイシュヤの法^{つとめ}である三百の器の食物を毎日三度施すとしても、わずか一刹那の慈愛から生まれる福德に比べると、その一部分にも及ばない。

（ヴァイシュヤとは四種のカーストの一つで庶民階級のこと。マヌ法典に、ヴァイシュヤの法として生類すべてに食べ物を施すべきことが説かれている）

85

神も人も慈愛ある者となり、彼らはまた守護をなし、心は幸せになり、樂が多く、毒や武器による害もなく、

86

努力の必要もなく、目的を成就し、梵天の世界に生まれ、たとえ解脱を得なくても、慈愛の法という八つの功德を得るだろう。

87

悟りに向けて一切有情に菩提心を生起させ、心にとどめて堅固にするならば、王よ、〔あなたは〕山の王（ヒマラヤの山）のように堅固になり、菩提心を常に得ることができるだろう。

88

信心により、八無暇（八つの悪い条件を持つ境涯）に落ちることなく、戒律〔を守ること〕により、善趣（人・阿修羅・天）に赴く。空性に馴染むことにより、すべての事物に対する無執着を得る。

89

不動により、憶念（注意深さ）を得て、思慮することにより知性が得られる。敬意を持つことで意味を理解する者となり、法を護ることで智慧ある者となるだろう。

90

法を聴聞し、施しを障りなく行うことにより、諸仏にまみえ、欲するものを速やかに獲得することができるだろう。

91

無執着により目的を達成し、物惜しみ（吝嗇）をしなければ、所有物や財産が増える。慢心しなければ首長になり、法の修習を耐え忍ぶことにより、記憶力を得る。

92

五つの心髓（五実：食塩・果実・砂糖水・ハニー・胡麻）を施し、恐れる者に無畏を施すなら、いかなる魔の力によっても害を被ることはなく、大きな力を持つ最もすぐれた者になるだろう。

六神通について

93

仏舎利塔に灯明と花輪〔を飾り、〕暗闇の中にいる者たちに灯明と灯油を施すならば、すべてを見通すすぐれた眼力（天眼通^{てんげんつう}）を得るだろう。

94

仏舎利塔を供養し、音楽と金剛鈴を捧げ、法螺貝と太鼓を捧げるならば、仏陀に具わるすぐれた聴力（天耳通^{てんにゅう}）を得るだろう。

95

他者の誤りを語らず、四肢の欠陥について語らず、意に応じて彼らを庇護するならば、他者の心を知るすぐれた力（他心通^{たしんつう}）を得るだろう。

96

履物や乗り物を施し、力の弱い者を運び、乗り物をもってラマに敬意を捧げるならば、天地を自由に駆けるすぐれた歩行力（神足通^{じんそくつう}）を得るだろう。

97

法の偉大さ、仏典の意味を記憶すること、汚れなき法雲により〔法を施すならば、〕過去世を思い出すすぐれた力（宿命通^{しゅくみょうつう}）を得るだろう。

98

一切の事物は無自性なので、正しくあるがままの姿を完全に知ることにより、第六のすぐれた能力である、あらゆる煩惱をことごとく滅する力（漏尽通^{るじんつう}：煩惱の滅尽）を得るだろう。

99

一切有情を解放するために、真如を知る平等性を持つ者が、慈悲に潤った如実智（真実を知る智慧）を修習するならば、最もすぐれた相を持つ勝利者となるだろう。

100

様々な清浄なる祈願によって、仏国土は清浄になるだろう。自在者牟尼にすぐれた大宝を捧げるならば、無量の光が流れ出すだろう。

101

ゆえに、このように行いと結果は互いに呼応すると知ったなら、常に有情利益を行うべきである。それこそあなたにとって、真に役立つものである。

以上が『宝行王正論』より、「悟りに至るために必要な資糧を積む」ことについて説かれた第3章である。

第4章 王道の教え

1

何に耐えられて、何に耐えられないかを知ることは難しく、たとえ王が非法の行いをしたり、道理に合わない行いをしたとしても、〔王に〕仕える人々はほとんど〔王を〕称賛する。ゆえに〔何が〕役に立ち、〔何が〕役に立たないかを知ることは難しい。

2

他のどんな人に対してでも、役に立つけれど不愉快な言葉を述べるのは難しい。しかし、広い大地を所有する王であるあなたに、比丘の私などがいったい何を言えるというのか。

3

それでもあなたを喜ばせ、有情を慈しむために、あなたには不快でも役立つことを私だけには述べさせてください。

4

弟子には、時機を選び、真理について、慈愛を持って、やさしく、意義のある役立つことを述べるべきである、と釈尊は言われた。ゆえに、〔私はこれからあなたに〕このように〔それを〕説くことにしよう。

5

堅固なる者よ、〔教えが説かれる時は〕怒りを起こさず、真実の言葉に耳を傾け、沐浴する際はよい水を使うのと同様に、聞くに値するものを選んで修行するべきである。

6

私はあなたに、今世においても来世においても役立つことを述べよう。それを知って、自分と他者に役立つことをなすべきである。

施し

7

以前、乞われたものを施したことによって得た財を、忘恩と貪欲によって必要な人に施さなければ、のちに目的を達成することはできない。

8

この世では、賃金が支払われない限り、労働者は旅路に必要な食料を運んでくれない。乞食や劣った者たちは、たとえ〔賃金が〕支払われなくても来世にまで運んでくれて、〔あなたが施したものは〕百倍になるだろう。

僧院の建立

9

常に大いなる慈悲の心を持ち、偉大な行為を喜ぶべきである。偉大な行為から生じる結果はすべて偉大なものになるだろう。

10

劣った王たちにより、心に思い浮かべることができないような法の抛り処となる三宝の象徴〔を作り、その僧院を〕広く知られた栄えあるものにしてください。

11

法のよりどころはどんなものでも、束縛する王の体毛が逆立つことはなく、死んでも称えられる言葉を聞くことはないのだから、王よ、そのようなものは建立しない方がましである。

12

非常に高潔で偉大な人たちは、たとえすべての富を失っても、慢心を離れて喜びを生み出し、劣った者たちの喜びを破壊する。

13

あなたは全財産を捨て、〔死に臨んで〕自由なく他の世界に行かなければならない。しかし、法のために使われたすべてのものは、〔よきカルマとして〕あなたの前に先行する。

14

先代の王のすべての財産は後継者〔である王〕の支配下に入るのだから、先代の王の法、幸せ、栄光のためにいったい何の役に立つと言うのか。

15

財産を使うことによってこの世で幸せになる。施すことにより、来世で幸せになる。財産を使わず、施しもしなければ財産は無駄になり、苦しみばかりが残り、どうして幸せになどなれようか。

16

〔王が〕死に直面した時は力を失い、大臣を通して施しをすることはできない。愛する者たちは〔死を前にした〕王に愛着せず、新しい王に愛情を求める者たちでさえ、力を持たないので施しをすることもできない。

17

ゆえに、元気なうちに、速やかにすべての財産を投げ出して、法の抛り処（僧院）を築くべきである。〔あなたは〕死の神という縁（条件）の中心に存在し、風の中に立っている灯明のようなものである。

宗教施設の提供

18

先代の王によって建立された法の抛り処となるお堂や、他者によって建てられた〔僧院などの施設も、〕元のように修復し、維持するべきである。

19

それら〔の施設は、〕不殺生・非暴力で、善き行いをし、禁戒を守り、一時的な愛情と、真実、忍耐、争い事がなく、常に精進する人々が用いるようにしてください。

20

〔そこでは、〕盲人、病人、障害者、苦しむ者、庇護のない者、乞食、手足が弱い者など、すべての人々が平等に、誰にも咎められることなく、飲食物を得られるようにするべきである。

21

法を得ているのに求めない人や、また、他国にいる王たちにも庇護を与え、できる限りよくしてあげてください。

長官の任命

22

〔僧院など〕すべての法の抛り処には、主な法輪に怠慢でなく、欲がなく、知識があり、法に敵っていて、誰に対しても害を与えない人を〔僧院規律長に〕任命するべきである。

23

政道を知り、法に従い、清らかで、心に過失がなく、家柄がよく、卓越した方法を心得ており、恩を知る人を大臣に任命するべきである。

24

雅量があり、物惜みせず、勇気があり、やさしく、行い正しく、堅固で、常に注意深く、法に従う人を軍隊長に任命するべきである。

25

法に敵っており、きれい好きで、意味を知り、経典に秀でており、やり方を心得ていて、均衡が取れており、愛情深く、年長の人を〔財務〕長官にするべきである。

26

〔あなたは〕毎月これらの人々から、収支のすべてについて聞くべきである。それを聞き、法の抛り処となるものなど、すべての意味を知って命令するべきである。

法と王国

27

あなたの王国が法のためであり、名声を得るためでなければ、それは大変実り多いものとなり、それ以外のものにならないようにするべきである。

28

この世の人々は、ほとんどが互いに争っている。ゆえに、あなたの王国と法となるものを正しくあるがままに聞くべきである。

29

知識があつて、年も相応にとり、家柄もよく、道理を知つて悪を慎み、なすべきことをよく見るひとを、あなたは常に多く集めるべきである。

慈愛と恩恵

30

処罰、入獄、鞭打ちの刑など〔を下したとしても、〕あなたは道理に外れたことをせず、慈悲の心に潤った行いをし、常に人々を庇護するべきである。

31

恐ろしい罪を犯したすべてのからだを持つ者たちに対しても、王よ、常に慈悲の心と利他心のみを起さすべきである。

32

恐ろしいひどい罪を犯し、殺生をした者に対しても、偉大な方は慈悲の心で、自らを貶めた人に対しても慈悲の心にとどまる。

囚人の釈放

33

毎日、または5日毎に、力の弱った囚人を釈放し、決して拘禁しておくことのないように、残りの者も適宜釈放するべきである。

34

もしあなたに、ある人を釈放する気持ちが起きないのなら、その人に対する自制を欠くことになるだろう。このように自らを戒めない気持ちから、途切れない罪など〔が生じる。〕

35

囚人が釈放されない限りは、理髪師、浴場、飲食物、薬などを備えて、楽しく過ごさせるようにすべきである。

36

処罰を与える時は、まるで値打ちのない息子たちを、値打ちのあるものにしようと願って〔処罰を加えるように、〕慈悲を持って行うべきである。

37

罪深い殺人を犯した人であっても、よく考えて知ることにより、処刑せず、拷問も与えずに、国から追放するようにすべきである。

正しい道への努力

38

自在な力があるすべての国を、視察者の目を見て、常に注意深く憶念をもって、法に適った行いをなすべきである。

39

功德のある人には、最高の施し、尊敬、奉仕などで広大にもてなすべきである。残りのすべての人に対しても、適宜、道理に従ってもてなすべきである。

40

王の樹木は忍耐という木陰を持ち、尊敬の花は大きく開花し、最高の施しは大きな結果をもたらし、民衆という鳥たちが舞い降りてくる。

41

施しと方便を身につけた王は、輝きを持つ者となり、まるで、生姜や胡椒で固めた砂糖菓子が好まれるように、人に好かれるだろう。

42

このように、論理によって分析するならば、あなたの王国は衰退することはないだろう。道理に合わないことはなく、法に反することもなく、法が生じるだろう。

43

王国は、世間の向こうから持って来たのではなく、またそれを持ち去ることもできない。王国は法によって得られるものであり、ゆえに、王国を求めるなら、法に反する行いをなしてはならない。

44

必要物資が尽きれば、王国は物資の流通が途絶えて確実に苦しむことになるので、王よ、そのようなことがないように努力するべきである。

45

必要物資が流通すれば、王国は、王国の物資が滞りなく流通して必ず喜ぶことになるので、王よ、そのように努力するべきである。

安楽（幸せ）について

46

四州のすべての大地を獲得したとしても、転法輪王の幸せは、からだと心の二種類のものがあるに過ぎない、とされている。

47

からだの幸せは感覚的なものであり、苦しみが存在しないだけのものである。心の幸せは識別作用によるものであり、単なる概念作用によって作られただけのものに過ぎない。

48

この世における安楽はみな、苦しみが存在しないだけのものであり、単なる概念に過ぎないものなので、それは究極的には意味を持たない。

49

島、国、町、住居、地域、座具、衣服、寝具、食物、飲物、象、馬、女性は、それぞれひとつずつ享受する対象である。

50

どんな時でも、ひとつのものに心が従事しているならば、その時はそれによって安楽が生じる。しかし、それ以外のものには心は従事していないので、それは究極的には意味を持たず、〔安楽も実体をもって存在しているのではない。〕

51

眼などの五つの知覚能力により、五つの対象を捉える時、どうして概念作用が働かないのか。〔概念作用が機能しなければ、〕その時、そこに安楽はない。

52

ある時、ひとつの対象をひとつの知覚能力によって認識するが、その際、他の知覚能力がそれ以外の他の対象物を認識することはない。ゆえに、その時他の〔知覚能力は〕無用に他ならない。

53

知覚能力によって見たものは、過去の対象の現れであるが、心によって対象物を理解したならば、幸せだと思って満足する。

知覚能力や対象物は実在しない

54

ひとつの知覚能力によってひとつの対象を認識するとしても、知覚能力は対象物がなければ機能せず、対象物もまた、知覚能力なしには〔用をなさず、〕意味を持たない。

55

このように、父と母に依存して子供が生まれると言われるが、同様に、眼と色（物質的存在）に依存して意識が生じると説明されている。

56

過去や未来の対象物は、知覚能力がなければ意味を持たない。〔過去の対象物と未来の対象物の〕二つを離れた別異の対象物は〔存在し〕ないので、現在の対象物も〔用をなさず、〕意味を持たない。

57

眼の錯乱によって、火の輪を恐れるのと同様に、知覚能力によってこれらの対象物を捉える。

58

すべての知覚能力とその対象物は、〔五大〕元素の本質であると言われている。〔五大〕元素のそれぞれに本質が存在しないのだから、これらは究極的に意味を持たない。

59

五大元素がそれぞれ別異であるならば、薪がなくても火があることになるだろう。〔もしそれらの元素が〕集まって存在するならば、それらは特徴（相）を持たないことになる。これらのことは、他の元素についても同様であることは確実である。

60

このように、両者いずれの場合（元素が別異か、集合した場合）でも、〔五大〕元素は意味を持たないのだから、それらの集合も意味を持たない。集合も意味を持たないのだから、色（物質的存在）もまた、究極的には意味を持たない。

感受などは実在しない

61

識（認識作用）・感受（受）・識別作用（想）・行（形成力）のすべても、そのそれぞれも、実体が存在しないので、究極の真理からすると、実在していない。

62

苦しみが鎮められた時、それを安楽であると慢心し、同様に安楽が破壊されると、苦しみに対しても慢心する。

解脱 - 執着を離れる

63

このように、〔すべては〕無自性であることから、楽と出会いたいという欲望と、苦から離れたいという欲望も断滅する。ゆえに、このように見る者は解脱に至る。

64

誰が心を見るのか、と問うならば、「心が〔見る〕」と世間の言説によって答える。心の働き（心所）がなければ、心（心王）は生じない。ゆえに、〔これらのものに〕意味はなく、同時に存在すると主張しているのでもない。

65

このように正しくあるがままに、有情が実体を持って存在していないことを知って、因を持たない火のように、拠り処を持たず、執着を離れた人は涅槃に至る。

66

このように、菩薩もまたこれをそのように見て、完全なる悟りを確実に〔成就〕すると言われるが、菩薩はただ慈悲のみにより、悟りに至るまで輪廻にとどまる。

大乘に対する批判

67

如来により、大乘において、菩薩の二資糧（功德と智慧）が示されている。大乘は、常に無知であり、憎しみを持つ人々によって非難されている。

68

大乘を誹謗する人は、功德と過失を知らず、功德を過失と認識し、あるいは、功德を憎んでいる。

69

大乘を誹謗する人は、他者を害することは過失であり、他者を利益することは功德であると知りながら、功德を憎むと言われている。

70

自らの利益を顧みることなく、利他というひとつの味を好む人の功德の源は大乘である。そうならば、それ（大乘）により、〔悪趣において〕自らを焼くだろう。

71

〔大乘に〕信心を持つ人でも、〔因果の法を否定するなど〕誤った見解を持つ人もいる。また他の人（信心を持たない人）は、怒って憎しみを持つだろう。たとえ信心をしていても焼かれるというならば、憎しみを持っている人（大乘に背を向けて誹謗する人）など言うまでもない。

72

毒で毒を制することがある。医療で言われているように、のちに苦しみが生じないように今苦しむことで〔のちの苦しみ〕を取り除く、ということにいったい何の矛盾があるというのか。

73

すべての法は、心を先行させ、心が要であるということが広く知られているのだから、利他の心を持つ人は、たとえ苦しみがあつたとしても、利他の心で利益をなすならば、どうして助けにならないことなどあろうか。

74

たとえ今苦しくても、のちに役立つ行いであるならば、それを行うべきである。まして、今が楽であり、自分にも他者にも利益をもたらすものならば、それをなすべきことは言うまでもない。これは古くからの法（ダルマ・教え）である。

75

もし、小さな幸せを犠牲にすることで、大きな幸せを見るならば、堅固な人は大楽を完全に見て、小さな幸せを捨てるべきである。

76

もし、それにも耐えられないならば、医者などが〔苦い〕薬を与えたことで害されることになるが、そのようなことは道理に合わない。

77

害があると思われることも、賢者にとっては利益とみなされることがある。一般例とその例外については、すべての論書の中で称えられている。

78

大乘においては、まず慈悲を先行させ、享受対象と汚れなき智慧について述べている。心を持つ者ならば、いったい誰がこれを非難するだろうか。

79

きわめて広大で非常に深遠な〔大乘〕に対して、怠慢な心を起こしてはならない。自分、他者、敵のすべてが無知により、大乘を批判する。

大乘の要点、大乘は仏説である

80

〔大乘の本質は、〕布施、持戒、忍耐、精進、禪定、智慧、慈悲である。大乘に従う者ならば、この理由により、大乘の過失を述べる者などいったいどこにいるだろうか。

81

持戒と布施によって利他を説き、精進と忍耐によって自利を完成し、禪定と智慧は解脱の因である。このように大乘の意味をまとめた。

82

利他と自利と解脱の目的は、声聞乗の〔經典の〕中で仏陀によって要約して説かれた。これらは六波羅蜜の中に含まれており、ゆえに、大乘は仏陀のお言葉である。

83

悟りへの大いなる道は、福德と智慧の本質であり、仏陀によって示された大乘のこの教えは、無知で盲目な者には耐えられないものである。

84

虚空のように量り知れない功德を持っていることにより、勝利者（仏陀）は不可思議な功德を具えていると説かれている。ゆえに、仏陀の偉大な本質は大乘〔の經典の中〕に述べられており、それを認めるべきである。

85

〔仏陀が説かれた〕持戒のみ〔の教え〕でさえ、聖者シャーリプトラですら知るところではないのだから、仏陀の偉大な特徴が量り知れないものであることを、どうして受け入れられないことなどあろうか。

86

大乘の教えでは、「不生」が示されている。他〔の流儀〕では「滅尽」として空性を説いている。「滅尽」と「不生」の意味は同じなのだから、それを受け入れるべきである。

87

仏陀の偉大な特徴は、空性〔を説かれたこと〕である。このように論理的に見てみると、大乘は後者（「不生」）から説かれ、賢者たちにとってはどうしてそれが同じだと言えるのか。

88

如来たちが説かれた〔密意〕をすべて知るのは容易ではない。そこで、乗り物（修行の道）は一乗である、三乗であると説かれたのであり、〔それに執着することなく〕平等心によって自分を守るべきである。

89

平等心に依拠すれば、罪を犯すことはない。憎しみを持つと罪を犯し、善を行うことはない。ゆえに、自らに善きものを求める者たちは、大乘を誹謗してはならない。

大乘と小乗（上座部仏教）

90

声聞乗には、菩薩の誓願、〔菩薩の〕行い、そして廻向が説かれていないので、〔声聞乗によって〕どうして菩薩になれると言うのか。

91

〔声聞乗では、〕菩薩が悟りに至るための土台について、仏陀は説かれなかった。何故ならば、勝利者たちよりもすぐれた他の正しい根拠（量）がいったいどこにあると言うのか。

92

四依（悟りに至るための四つの拠り処）、〔四〕聖諦の意味、七覚支（七つの悟りを生む要素）を具えている道が声聞の道と共通であるならば、いったい誰が仏陀という最勝なる果報を得ると言うのか。

（四依：人でなく言葉に、言葉でなく意味に、一時的な意味でなく究極の意味に、知的理解でなく、直接体験の意味に依るべきである）

93

声聞乗〔の経典の中〕には、悟りへの道を実践するために説かれたお言葉はない。しかし、大乘の経典には説かれているので、賢者たちはそれを仏陀の言葉として受け入れている。

能力に応じて教える（対機説法）

94

文法学者は最初に、弟子たちにアルファベットを読ませる。これと同様に、仏陀も弟子たちが耐えられるだけの法を〔最初に〕示された。

95

ある人々には罪ある行いから離れるために法を説き、ある人々には福德を積むために法を説き、ある人々にはこの両方に依存する〔ように〕法を説かれた。

96

またある人々には、その両方を説かず、深遠で、恐れる人を畏怖させる〔法を説き、〕ある人々には、空性と慈悲の心髓を持つ悟りを成就させるために〔法を〕説かれた。

97

このように、賢者たちは大乘に対する怒りを滅し、完全なる悟りを成就するために、特にすぐれた信心を起こすべきである。

大乘への清らかな信心と、大乘が説く実践により、無上の悟りを得て、すべての幸せもその途中で成就する。

ここで、〔あなたが支配者である時は、〕布施、持戒、忍耐の法〔を堅固に実践するべきであり、〕特に在家信者に対しては、慈悲の心で心髄の教えに慣れ親しむべきである。

しかし、世界が道理に外れたことをするならば、法に基づいて王国を守るのは難しく、その時は、法と知名度のために、あなたが出家することが正しい。

以上が『宝行王正論』より、「王道の教え」について説かれた第4章である。

第5章 菩薩行

1

次に、出家した人は初めに学処（学ぶべき事柄、戒のこと）をよく尊重するべきであり、波羅提木叉と律を維持し、〔経・律・論の三蔵について〕たくさん聞き、その意味を確立するよう努めるべきである。

五十七の過失

2

次に、たとえ些細なものでも過失を認めたならば、過失の根源をすべて捨て、五十七ある過失を数えあげたものを、努力して確実に考察するべきである。

3

① 怒り（忿）とは心がかき乱されている状態であり、それに結びつくのが② 恨み（恨）である。③ 自分の罪を隠すこと（覆）とは、自分の罪や欠点を隠すことであり、④ 八つ当たり（恨みや怒りから他人に悪口雑言を吐くこと）（惱）とは、その欠点に執着することである。

4

⑤ 証かし^{たぶら}とは他人を欺くことであり、⑥ 諂い^{へつら}とは他人をひどく騙すことである。⑦ 嫉妬^{そねみ}（嫉）とは他人の長所・功德を妬むことであり、⑧ 物惜しみ・吝嗇^{けん}（慳）とは施しを恐れることである。

5

⑨ 無慚^{むざん}と⑩ 無愧^{むぎ}はそれぞれ、自らの罪を恥じないことと、他者に対する恥を知らないことである。⑪ 傲慢とは他者を敬わないことであり、⑫ 過失の始まりとは、怒りが掻き立てられることである。

6

⑬ 驕り^{おご}とは高ぶることであり、⑭ 放逸^{ほういつ}とは、諸々の善を行わないことである。⑮ 慢^{ほこり}には七種あり、それをここから分けて説く。

7

そのうち、慢心を起こして、〔自分は〕劣っている者より劣っている、同等の者と等しい、劣っている者よりすぐれている、または等しいと誇ることを、これが① 慢と言われる。

8

どんな性質からしても自分よりすぐれている人と等しいと誇ること、および、自分よりすぐれている人よりさらにすぐれていると誇ること、これが (2) 高慢 (過慢) と言われる。

9

最高の人よりもさらにすぐれていると誇ることが (3) 思い上がり (慢過慢) であり、あたかも腫れ物の上にさらに疱瘡が生じるように有害である。

10

実質因 (取) といわれる五蘊のすべては空であるが、愚かなため、それらに「自我がある」という我執を起す。それが (4) 我執心 (我慢) と言われる。

11

〔修行の〕結果を得ていないのに、得たと考えるのが (5) うぬぼれ (増上慢) である。悪業をなすことを称えることが (6) 邪慢 であると、賢者は理解する。

12

自分は必要ない、と自分を軽蔑することが (7) 卑下慢 であると言われる。これらを総括して、七種の慢 と呼ぶ。

13

⑩ [1] 偽善 (詐偽) とは、利得や世間体のために知覚能力を自制することである。⑪ [2] へつらい (諂) とは、利得や名聞を得るために人前で快い言葉を並べ立てることである。

14

[3] ほのめかし とは、他人の財を得るためにそれに讃辞を並べることである。⑫ [4] 権力を使う (呵責) とは、利得を得るためにあからさまに他者を責め立てることである。

15

⑬ [5] 利得によってさらに利得を求めること (利求利：小を与えて大を得る) とは、前にももらったものを褒め称えることにより、相手からより以上の利得を得ようとするものである。⑭ 過失の陳述 とは、他者の誤りをひとつひとつ述べ立てることである。

(13、14、15 偈には、[1] から [5] までの生活の糧を得る五つの間違った方法について解説されている。)

16

⑮ 呆然 とは、それぞれを分析することができず、あるいは病に打ち負かされている状態のことである。⑯ 悪貪 とは、自分が使用するよくない器具に対して〔生じるものであり、〕懈怠 のある人にあるものである。

17

⑰ [自他の] 区別の思い とは、貪り、怒り、愚かさによって思いが汚されていることである。⑱ 不注意 (不作意) とは、心で現実に観察していないことである。

18

行いに正しく努力しないために、⑲ 尊敬が欠如 しており、師に対して偽りがあるのが、⑳ 破廉恥 (不恭敬) である。このような人は悪人だと言われる。

19

㉑ 染着 (心が物事に執着して離れないこと) は小さな煩惱であり、欲界の 貪着 (貪り求めて執着すること) から生じる。㉒ 偏執 (偏った執着) は欲望から生じる極めて大きな束縛である。

20

③⑩ 執着（貪）とは、自分の事物に対する貪りであり、それから貪着を持った心が生じる。他者の事物に対して執着することが③⑪ 不当な貪りと言われる。

21

妻にすべきでない女性に執着することが、③⑫ 執着すべきでないものへの執着である。③⑬ 悪欲とは、徳がないにもかかわらず、徳があると偽ることである。

22

③⑭ 大きな欲望とは、激しい渴望により、満足の喜びが欠けていることである。③⑮ 得欲とは、自分には徳が備わっていると何とかして知らせようとする欲することである。

23

③⑯ 不忍とは、他者が加える害や自分に生じる苦しみを忍ばない（我慢しない）ことである。③⑰ 無作法とは、師や指導者のすることに尊敬を払わないことである。

24

③⑱ 忠告を聞き入れないこと（難語）とは、法に適った言葉が述べられても、それを尊重しないことである。③⑲ 親しい人との結びつきを分別すること（親覚）とは、親しい人への愛着である。

25

④⑰ 故郷への愛着とは、それを求めてその長所を述べ立てることである。また、④⑱ 不死分別とは、死の恐怖を恐れないことである。

26

④⑲ 随順を求める思いとは、功德を備えているふりをして、他の人たちが自分を何とかして師にするように、と考えることである。

27

④⑳ 他者に執着する思いとは、〔男でも女でも〕他の人々に愛着することであり、④㉑ 憎しみの心を抱くとは、損得を考えることである。

28

④㉒ 不快とは、落ち着くところのない心であり、④㉓ 羨みとは、欲に濁っている心のことである。

④㉔ 疲倦^{ひけん}とは、からだ^{ひけん}が怠惰で精進のないことであり、〔自分にはとてもできないと〕落胆する過失である。

29

④㉕ 変化とは、煩悩によってからだの色つやが変化することである。④㉖ 食を欲しないこと
（食酔）^{じきすい}とは、不節食によってからだ^{じきすい}が安らかでないことであると言われている。

30

④㉗ 心の卑弱とは、心が落ち込んでいることであり、④㉘ 食欲（欲々）とは、五欲（色・声・香・味・触の五つの感覚器官の対象）を貪り求めることである。

31

④㉙ 害意とは、過去・未来・現在の三世にわたって自分と味方と敵のいずれにもある無意味な疑念から、他者を害そうという心であり、九つの原因から生じる。

32

からだ^{ひけん}が鈍重になり、そのために行動をしないのが④㉚ 夢である。眠っているのが、④㉛ 睡眠であり、④㉜ 軽薄（悼挙）とは、心身〔が昂奮し〕鎮められていない状態である。

33

④㉝ 後悔とは、悪事をなして悔やむことであり、のちになって苦悩することから生じる。四諦、三宝などに関して心が二つに分かれ〔決めかね〕ることが、④㉞ 疑いである。

菩薩の行い

34

自戒に努める者は、菩薩が断たねばならないこれらの〔五十七の過失〕をよく断滅し、それらの過失を離れるなら、容易に功德に依拠することだろう。

35

そのうち、菩薩の功德を要約すると、布施、持戒、忍耐、精進、禅定、智慧、慈悲などである。

36

布施とは、自分が持っている財を施すことであり、持戒は、他者に利益を行うことである。忍耐とは怒りを断つことであり、精進とは善行に努めることである。

37

禅定とは、心を一点に集中して錯乱のないことであり、智慧とは、真理の意味を明確に知ることである。慈悲とは、一切有情に対しての憐れみが一味平等である心のことである。

38

布施によって財の共有があり、持戒によって安穩があり、忍耐によって威力があり、精進によって輝きがあり、禅定によって寂靜があり、智慧によって解脱があり、慈悲によってあらゆる目的の達成がある。

39

これらの七つの〔法〕を余すところなく同時に完成する者は、量り知れない智慧の世界においてこの世の守護者（仏陀）〔の境地〕に至るだろう。

菩薩の十地

40

このように声聞乗には声聞の八地があると言われており、同様に大乘には、菩薩の十地がある。

41

〔その第一の段階である〕初地は、歓喜地と言われる。菩薩が喜びを得るからであり、三つの束縛を滅して如来の種姓に生まれるからである。

42

それが熟した結果として、最もすぐれた施波羅蜜を得る。百の世界を揺るがせ、閻浮提（南瞻部洲なんせんぶしゅう、人間世界）の大自然者となるだろう。

43

第二地は無垢と言われる。身・口・意による十のすべての行いに汚れがないからであり、自然にそれらの戒めに安住するからである。

44

それが熟した結果として、戒波羅蜜が最勝なるものとなり、栄光ある七大宝の主として有情を利益する転法輪王となるだろう。また、一切有情の破戒を断滅することに秀でることになるだろう。

45

第三地は発光〔と言われる。〕寂靜なる智慧の光が生じるからである。禪定と神通力が生じ、欲望と怒りが滅尽するからである。

46

それが熟した結果として、忍耐と精進が特にすぐれ、〔三十三〕天の大自在神となり、欲界の欲望を断つことに秀でるだろう。

47

第四地は焰慧（^{えんね}輝き）と言われる。正しい智慧の光を得るからであり、特に、三十七の悟りに至る修行（三十七道品）を余すところなく修習するからである。

48

それが熟した結果として、須夜摩天（^{しゅやまてん}）の王となり、有身見（我と我がものに対する執着）が生じるのをことごとく打ち砕くことに秀でるだろう。

（須夜摩天王：欲界六欲天の第三天の天人）

49

第五地は難勝（無敵）と言われる。いかなるものも打ち勝つことが難しいからであり、〔四〕聖諦などの微細な意味を理解することに秀でているからである。

50

それが熟した結果として、兜率天の王となり、すべての非仏教徒たちの煩惱による見解を退けることになるだろう。

51

第六地は現前（直面）と言われる。仏陀の法に直面するからであり、止と観を修習することにより、止滅を成就して広大になるからである。

52

それが熟した結果として、化樂天（^{けらくてん}）の王となり、声聞たちによって退けられることなく、特にすぐれた自信（増上慢）を持つ者を制圧することになるだろう。

（化樂天：欲界における六欲天の第五の天）

53

第七地は遠行（^{おんぎょう}遠くへ行くこと）と言われる。〔功德の〕数が遠くまで行き渡っているからであり、そこでは刹那ごとに止滅の禪定（滅尽定）に入るからである。

54

それが熟した結果として自在天の王となり、〔四〕聖諦に習熟した偉大な最高の師となるだろう。

55

第八地は童子地と言われ、またそれは不動地〔とも言われる。〕無分別だからであり、何故なら、不動であり、身・口・意の享受対象は量り知れないからである。

56

それが熟した結果として、千の世界の主である梵天となり、阿羅漢、独覚などもその意味を確立することにおいて、はるかに及ばないだろう。

57

第九地は善慧（善き智慧）と言われる。智慧と言われるものは王の摂政のようなものであり、何故ならば、四無碍しむげの智慧を得て、この地において智慧が卓越するからである。

（四無碍：四種の障りがないこと）

58

それが熟した結果として、二千の世界の主である梵天の王となり、有情の願いを聞くことにおいて阿羅漢などはるかに及ばないだろう。

59

第十地は法雲と言われる。聖なる法の雨が降るからであり、菩薩や仏陀が光によって灌頂を授けるからである。

60

それが熟した結果として、淨居天じょうごてんの王となり、量り知れない智慧の享受対象の主は、最もすぐれた大自在天となるだろう。

（淨居天とは、色界に属する第四禪の五つの天界のこと。この天界は欲を離れた清浄な諸天がいる所なので、淨居天と名づけている）

仏陀の境地

61

これらの十種が菩薩の十地であると説かれている。すべての仏陀たちの地はそれとは異なり、すべてにおいて量り知れないものである。

62

その広大なることは、十力を備えているというほどのことだけが説かれて〔知られて〕おり、その十力のひとつひとつは、また全世界と同じように無量である。

63

すべての仏陀たちが持つ無量という特徴は、すべての方位にわたって遍在する虚空・地・水・火・風のものであるとしか述べようがない。

64

もし、〔諸仏の〕因がそれだけであり、無量であると思えないならば、仏陀たちの無量という特徴を信じることはできないであろう。

菩薩の願い - 誓願二十頌

65

そこで、仏像や仏舎利塔の前や、他のところでもよいが、次の二十頌を毎日三回唱えるべきである。

66

仏陀・仏法・僧伽と、菩薩たちにも常に礼拝し、帰依いたします、〔という箇所から〕始めて、供養に値するものたちに私は礼拝いたします。〔と続く。〕

67

〔私は〕罪ある行いをやめ、すべての福德を完全に維持いたします。一切有情のすべての福德を随喜いたします。

68

私は頂礼合掌し、〔無上正等覚を得た方々に〕法輪を回していただくため、有情が存在する限り〔この世に〕とどまられるように、完全なる仏陀たちにお願いいたします。

69

このようになした福德と、私がなしたこと、まだなしていない〔福德〕は何でも、それによって、一切有情が無上の菩提心を得ることができますように。

70

一切有情が汚れなき知覚能力を完全に備え、八無暇（八つの悪い条件）のすべてを克服し、行いが自由自在になり、正しい生活の糧を得ることができますように。

71

一切有情がその手に宝石を得て、すべての必要物資には限りがなく、この輪廻に存在する限り尽きることがありませんように。

72

すべての女性たちがいかなる時も、すぐれた人（男子）に生まれ変わりますように。そしてすべての有情たちが智慧という知性と、倫理という足を得ることができますように。

73

からだを持つ者たちが、容貌がよく、姿が美しく、威光に満ち、見目麗しく、病がなく、力を備え、長寿でありますように。

74

あらゆる方便に通じて、すべての苦しみから解放され、三宝に帰依し、仏法の偉大な宝を持つ者となりますように。

75

愛、慈悲、喜び、平等心に安住し、布施、持戒、忍耐、精進、禅定、智慧によって飾られ、

76

〔福德と智慧の〕資糧をすべて完全に備え、相好うるわしく、不可思議なる十地に間断なく赴くことができますように。

77

私もまたこのような功德や、他のすべての功德によって飾られて、すべての過失から離れ、一切有情に対する最高の愛を持ち、

78

一切有情が願う善をすべて円満して、常にすべての人々の苦しみを取り除くことができますように。

79

すべての世界において、どんな人でも恐れを持つ者が、すべて私の名を聞くだけで、恐れが何もなくなりますように。

80

人々が、私を見て、思い出し、ただ名のみを聞いただけで人々が〔清らかな信心を起し、〕乱れることなく、心安らかになり、完全なる無上の悟り（無上正等覚）に至ることができますように。

81

すべての人生において、〔その生に〕随順した五つの神通力が得られますように。一切有情が、いついかなる時でも利益と安楽を得ることができますように。

82

すべての世界において、もし誰かが罪ある行いをなそうとするならば、彼らすべてを害することなく、常に速やかに〔罪悪への欲望から〕離れることができますように。

83

地、水、火、風、空、薬草、寺院の樹木のように、常にすべての有情が望み通りに妨げなく、〔私を〕用いることができますように。

84

一切有情を〔自分の〕命のように慈しみ、自分よりも彼らのことを、より強く慈しむことができますように。彼らの罪は私に実り、私の徳はすべて彼らに実りますように。

85

たとえわずかでも、解脱していない有情がいる限り、無上の悟りを得たとしても、彼らのために〔輪廻に〕とどまることができますように。

86

このように述べた福德は、もしそれが形あるものならば、ガンジス川の砂の数にも匹敵する世界の中にも入りきることはないだろう。

87

この〔誓願〕は世尊によって説かれ、〔因と果が無量であるという〕理由もここに現れている。有情の世界は無量であり、〔彼らを〕利益したいという願いもまた同様〔に無量〕である。

法を慈しみ、善友（ラマ）に仕える

88

以上のように、私はあなたに要約して法を説いたが、そのどれも、あなたは〔自分の〕からだを大切にするように、常にいとおしむべきである。

89

もしこの法を大切にすれば、それは究極的に自分のからだをいとおしむことになる。〔からだを〕大切にすれば利益の行いをしたいなら、それは法によってなすべきである。

90

ゆえに、自分に仕えるように法に仕え、法に仕えるように達成し、達成したように智慧〔に仕え、〕智慧に〔仕えるように〕賢者に仕えるべきである。

91

清らかで、慈しみ（愛）があり、智慧があり、利益をなそうとして適切な言葉を語る人に、自ら疑惑を挟むならば、その人は自分のわずかな利益さえ損なってしまうだろう。

92

清らかで、慈しみ（愛）があり、智慧があり、言葉に才知があり、利益をなそうとして適切な言葉を語る人に、「私は守護者（仏陀）とともにいる」と言って、王は自ら自制の心を起こすべきである。

93

このような善友（ラマ）たちの特徴をまとめて知るべきである。満足と慈悲と持戒を備え、煩惱を滅する智慧を持っていると。

94

それらの人々があなたに仕えるならば、あなたはそれを知って尊敬するべきである。この流儀は卓越したものであり、この完全な教義によって成就するならば、最勝なるものを得るだろう。

正しい言葉の行い

95

真実をもって有情にやさしい言葉を述べ、善をなす方法は得難いが、戒めをおろそかにせず、自在によい言葉を話すべきである。

96

よく律して慎み深く、惰眠を離れ、光輝があり、心は寂静で、心身のうわつきがなく、高ぶることなく、動揺せず、穏やかに行動するべきである。

97

満月のように澄み渡り、秋の陽のように光り輝き、大海のように深遠で、山の王のように堅固である法（ダルマ）に依存するべきである。

98

あらゆる過失を離れ、あらゆる功德によって飾られ、一切有情に依存される人となり、一切智者として振舞うべきである。

結び

99

この法は、ただ王だけに説かれるのみでなく、他の人々にも道理に合わせて説かれるべきものである。他の人々にも利益を与えようと思うからである。

100

自他すべてが完全な悟りを達成するように、王よ、この教えに説かれていることを日々よく考えるべきである。

持戒、師への尊敬、忍耐、嫉妬しないこと、物惜しみを離れて〔見返りを〕望むことなく、利他をなす裕福な人々と、貧しい人々のために財産を共有し、貧困に苦しむ者を救済すること、善を守り、悪を捨てること、正法を受持すること、悟りを求める人々は、常にこれらを実践すべきである。

以上が『宝行王正論』より、「王道の教え」について説かれた第5章である。

『王への教訓-宝の首飾り』と言われる、偉大なる導師、聖者ナーガールジュナの著作はここに完結した。インドの僧院長ジュニャーナガルバとチベットの翻訳官で比丘であるルー・ギャルツェンが翻訳・校正して完成させた。のちにインドの僧院長カナカワラムとチベットの翻訳官パツァブ・ニマタクが三巻の漢訳書に付き合わせてよく修正した。

Japanese translation draft by Maria Rinchen, Sep. 2019